

# 幼児時代



## 藤田健治

幼児時代についての、おとなのもつ記憶はいつ頃まで遡れるものであろうか。

自分では直接経験に基づく記憶と想っているものが、実はあとで聞いた話の記憶だったりして、本当のところはなかなか確かめにくいのが実状のようである。

それだけのことを前提にした上で、私には乳ばなれした後も、母の膝の上について乳を呑んだ記憶がある。それは数年五歳位まででももちろん母の乳が恋しさの戯れではあったが、よく笑われながら許されていた。私が末っ子で、四人の姉ばかりのただ一人の男の子だったところから、甘やかされていた結果であろう。しか

しそのためか今でも母親のゆたかな暖かい胸の白い肌を思いだせるように思う。

家は東京の小石川林町、今もある明化小学校の校庭に近いところで、めずらしく草葎屋根の家であった。冬暖かで夏涼しいといわれた家であったが、母の言葉通りだと、はじめは狐のなく声がきこえたという、淋しい野原の中にあつたところからの家で、その辺では私の家と隣りと都合二軒だけが草葎だった。

庭は広く大きな松が中央に、右手に八重桜、その二つが中心で、あと丁子や黄梅やねむの木などの植込みがあり、垣根は青いどげのある「からたち」で、釣瓶

井戸は深く水は澄んで、そのそばに真直に直立する大きな杉の木が一本あった。門の近くに椿と見越の松とゆずり葉、そんな木を憶えている。

私は親爺のお古のチョッキを和服の着物の上に着こんで、近所ではチョッキの坊ちゃんと呼ばれていた。今の人には解りにくからうが、当時は、皆普通は和服で、私たちも小学校はそれに小倉の袴をはいて通ったもので、中学になってはじめて詰襟の洋服になるので、小さい子どもの洋服などは余程のことでないといけない時代であった。その時代に私は洋服のよさと便利さをチョッキで味わっていたようである。幼い時のことだから、そのチョッキは多分膝下まで位あって、珍妙な恰好だったろうが、結構本人は満足していたらしい。私はそのいくつものポケットにいろいろな宝物を入れていたが、今でも憶えているのは、何日か前に入れて忘れていた茹でた空豆を、まさぐった指でさがしあてて、得意で出して食

べたことである。

幼稚園などのない時代のことだから、私の幼児時代の遊びも教育も友だちも次々というようになる。

門を出てちょっと右へ行くと一行院という寺があって、徳本上人のおられた寺であった。私たちはそれをなままって「トッコンさま」といっていて、それが同時に寺の名として通用した。その寺門の土台になる部分は、前後とも一段高く石で畳んであって、二、三段の階段があり、屋根を支えている太い円い木の門柱の台座は、傾斜を中くばみにくった石であったが、私はそこで石けりをしたりこまをまわしたり、少し大きくなると石の台座にたてかけて青写真をやいたりした。

その寺門の前に少し広場があって、ここによく道路工事に使う砂利の山がおりてあり、それに登って「お山の大将おれ一人」という遊びの真似をした。これはもっと大きい子どもたちが集団でやる遊びで、「後から来るものつきおとせ」と

いう文句がつづく通り、一人で山の上を占領して他人を登らせぬのが本来だが、幼いからそこまではできないので、その真似をしていらしいのである。

一行院の前を少し白山の方へ行くと同じ側に地藏堂があった。赤い前掛をした石の地藏さまには、祖母につれられてお参りをした。特に私が百日咳をやった時、祖母は日参したらしく、癒ってから私もお礼参りに行ったように思う。これで解るように祖母は私の幼児時代をしめる大きな存在であった。遊び相手にはたくさんの姉たちがいたわけだが、幼い私が相手にならず、また皆私に先だって小学校に行っていたためか、姉たちと遊んだ記憶はあまりない。これに反して私の幼児生活の主たる相手は祖母であった。

この天保生まれの祖母は故郷の新潟市の廻船問屋の祖父が早く死んでから、いつも私の家にいたが、この祖母に私は家庭における幼児教育を受けたのである。この祖母にせがんできいた話を通じて私

は幕末から明治にわたる精神的教養を得たようである。

遊戯も唱歌もない当時の幼児教育では「お話」が中心となるのは自然であった。祖母の話は多岐にわたっていた。私に今も強く印象づけられているのは、恐らく祖母のみた歌舞伎狂言の知識からなのだろう「傾城阿波の鳴門」のおつるの話であった。おつるが盗まれた家の重宝の探索に国を離れた父母を尋ねて、巡礼となって来て、実の母に会いながら誰と明かさぬ母に、「父様は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申します」という台詞を今もおぼえている。同じような親子物では「石童丸」の話がある。女人禁制の高野山に庵をむすぶ父に、母と別れて一人で逢いに来る石童丸と父との、それと明さぬ慕情の話の印象も強かった。

こうした親子の情については、地獄極楽の話が幼児の道德教育になっていたかもしれない。嘘をつく舌を抜かれるというその判官は閻魔さまであり、その摘

発者は、三途河の婆で、彼女は亡者を標にし、浄玻璃の鏡にうつして生前の悪行を一遍に眼のあたりにあらわす。闍魔さまは真赤な顔をし、眼をいからせて怒っているが、それは人間が悪いからで、白髪をみだしてにらんでいる三途河の婆も本来は皆正しいよい人なのだともきかされた。そして子どもについては賽の河原で石をつみ、一つつんでは父のため一つつんでは母のためと供養塔にしてつむ石を、鬼が出てきて金棒でつきこわし、その効果を無にする悲しさを地藏様が救って下さるという話も、仏の慈悲を教えた宗教教育であったかもしれない。

もちろん桃太郎や花咲爺や舌切雀などの話もあったが、そのほかに民間伝説らしい化物の話もあった。「代々伝わるジヨジメが踊る」といってバタンバタンと音を立てて古い家の廊下を夜あるく下駄のお化けや、新潟という、貿易港に関係あるらしい鴻池のお嫁入の道具をつんだ船が帆をあげて幾艘も幾艘も来るとい

話、それから日本の昔話にお定まりの継子の話、但し私のきいたのはそう悲しいものでなかったが、それが今考えるとどういうわけか、ユリシースの系統をひく百合若伝説の中の一部と符合していた。

それは、島ながしで異郷の空に行かされる継子の姫が、手紙を書く墨と硯が欲しいというので、故郷の忠義な召使が伝書鳩のように小鳥に背負わせて送るが、小鳥が重さにたえきれず海におちる。だが、鳥は島に流れついて役目を果たすという趣旨のものであった。これらのお話は毎日祖母にせがんできいたもので、やがてそれが繰返されると、それは知っているとかいって、おしまいには話の種がつきたと祖母を困らせたものである。

幼児時代の友だちは誰であったか。私の家の庭の外の道を隔てたところに、私の家と親しかった、お父さんが昔の農商務省の役人だったTaさんの二人の息子さんと一人の娘さんがあって、それが祖母を除くと重要な遊び相手になった。二人

の兄さんはもう小学校の終わりの方か中学に行っておられたと思うが、相撲の相手になったりしたが、最も親しかったのは一つ年上の娘さんの方で、この人よく庭にごぎをひいて飯事をした。

しかしもう一人私の幼児時代の人間形成の上で見のがせない人がいる。それは私の家の庭さきに一軒、家があって、そこにToさんという指物師の人が住んでおられた。この家は普通の座敷のほかに離れの仕事場があって、そこで当然鏡台針箱小篋笥等が造られるのだが、この仕事場に私は毎日入りびたりだったように思う。私はそこで小さい木切をもらって、それを積んだり、ニカワでつけたり、トクサの乾したのでみがいりしたり。このトクサはもちろんヤスリの代りだが、普通二本に先の分れた木の棒にさして使った。だから二本ざしの(武士)というように呼ばれていた。この指物師のおじさんは、幼い私に手工の先生だったわけで、この先生は仕事のひまに私をよくこぼせ

るために、小さい岡持やら小引出やら拍手子やらを造って下さった。

私の姉はその後いろいろな意味で私に影響を与えたが、幼い時の記憶にあるのは、私と一まわり以上年のちがう一番上の姉の結婚の時、母の膝にのってホロのある人力車に乗って、恐らく式場へであろう行ったことと、そのあと母といっしょに義兄の家にしばらくいていたことである。その義兄の任地の日立鉱山へ行くため、常盤線の汽車に乗るべく、夜の上野のプラットフォームを、明治の娘らしく鬘まげをゆって白い紗のえり巻をした姉に、手を引かれて歩いたことである。

日立鉱山の役宅は二軒つづきの長屋で、そのちょうど間の戸袋は夜戸をしめると子どもを通すほどの余裕があるので、同じ年頃のお隣のRさんの女の子さんの何人かと遊んだようである。

ここでもかなり中年の女中から話をせびった。この女中の話はまた妙に言葉の綾にからんだ話ばかりで、その一つは、

魚屋と屑屋と古金屋との話で、魚屋が魚魚といつて売り歩くと、そのあとを屑屋が古い古いというので喧嘩になり、古金屋が仲裁にはいつて屑屋のあとについて「古金」(古かね)といつて歩くことで落着いたという話である。

今一つは金杓子屋の書いた引越通知で「金杓子屋の伝兵衛亀戸に引越申候」というのを字の知らぬまま仮名で書いたところ、それを見た人が、「悲しや口惜しや伝兵衛が冥土へ引越申候」と読んで驚いたという話。さらにもう一つは馬鹿息子の話であるが、お風呂が熱いので沢庵でかきまわしたというお定まりの話のほかに、何かでけがをしたことを報告する手紙に、血が出たというのを「朱塗の膳碗ぜんわんドツと流れ」という妙な形容をするのがおもしろくて、何度も繰り返し返させて悦んだものである。

幼児の私がたった一度対社会的に行動したことがある。それは、私の父は軽い近視の眼鏡をかけていたが、ある日出勤の

時それを忘れて行ってしまった。その時祖母の提案だったが、私にそれをもたせてやるということになって、眼鏡を風呂敷でほそくまいて腰にゆわえ、人力車に一人のつて丸の内のN会社まで行き、入口の受付で、父の役名所属をいつて渡して来たことであつた。それは三菱ヶ原にたつた赤練瓦の建物で、それに象徴される会社というものに、家の代表として一人で応対するという、幼児の私には初めての晴がましい役目だったが、立派だったといつて大いにほめられた。

しかしその私が小学校にはいった時は妙にはにかみとみしりりとで友だちと遊べず、休み時間に、よく教室からすぐ運動場に出る小階段のそばで、一人ぼつねんと立っていたことを思い出す。それで姉の友だちの弟でいっしょに入学した子どもに引合わされて、だんだんとなじんだようである。

しかし何といつても幼児の私にとつての大事件は、私たちが可愛がついていた白

という犬が犬殺しにつかまったことであつた。当時犬殺しといつていたものは、狂犬病予防のために野犬狩をする人たちのことで、それが犬にとって脅威なのは、ちよど子どもたちにとって「人さらい」がそうであるのに似ていた。ただしその人さらいが、噂以上に事実どの程度あつたかわからない。ただそれが子どもたちを見知らぬ人の誘惑から守るのには役立つたが、それには恐ろしいが、ただの噂だけの非現実味が多分にあつた。

しかし犬殺しは現実的で、その暴力のもつ残忍さと恐怖が幼い心を引きさいてしまつた。私は今も縁の下に逃げこんだ白を二人の犬殺しが追いたてて、輪にした針金を頭に引っかけて捕える光景を眼にした時の淋しいショックを思い出す。その日は何も食べられないほど、何ともいえない厭な気分だつた。

しかし幼児の記憶をそれでおえるのは余りに悲しいので、最後にもう一つ甘い追憶を語つて終りとした。事の前後は

よくわからないが、多分姉の一人といつしよに遠出の遊び、それも白山神社のお祭りを見ての帰りではなかつたかと思う。それには姉の友だちもいっしょだつたが、私が歩き疲れたとでもいつたのだろう、その姉の友だちが私を背負つてくれた。それは大柄な女の子であつたが、私を負うて歩く内に、つい着物の胸がはだけるのを、負われた私が衣紋を直してやつたのを覚えてゐる。その子は私をおろした後で、その私の心づかいを姉に語つて、ほめられたので、余計その日のことをよく覚えてゐるのであろう。

白山下から林町への道は、昔は側に大溝が流れていたが、その道をその子の背に負ぶさつて歩いた昔が懐かしく、その子の髪の日向臭い香りが実感できるように思われる。私はその子の顔を今も覚えていて、その後その同じ顔の女の方を近所に見かけて驚いたことがある。年の具合から見て私よりずっと若い方なので、そんなはずもないに拘らず、昔の人の娘

さんでもあろうかと、思わず声をかけた衝動を感じたほどであつた。

幼い心におとすさまじまなあとかた、その心に及ぼす影響は、その心を育て大きく成長させて行く。私たちの幼い頃も幼稚園はどこかに、多分女高師などにはあつたのではあろうが、一般にはほとんど見かけず、私にはそうした幼児教育にふれた経験はないが、それはまたそれなりにいろいろな形で幼児教育をもつたのである。

六十年も昔の古い話であるが、ある意味ではつい昨日のこのようでもある。なぜならその経験は今もなお私というものの中で生きつづけているといえるわけである。そう思うと、正規の教育はもてるんのこと、どんな行きずりでも幼児に接する時、その心に刻むあとかたの大切さを忘れるわけにはいかないのである。

(前お茶の水女子大学学長・哲学専攻)